おおさか支局
〒530-8251（住所不要）
毎日新聞社会部おおさか支局
TEL06・6346・8443
FAX06・6346・8444

メールはat-osaka@mainichi.co.jp
読者の皆さんの取り上げてほしいテーマなど、お寄せください。
【購読問い合わせ】
フリーダイヤル0120-468012

大阪
地域面3ページ→

地球村に架ける橋

干ばつに強いプロジェクト

「命守るため村を変える」

ノンフィクション作家 高賛侑（コウ チャ ニュウ）

〒779―3403 徳島県吉野川市山川町前川120の4 ☎0883・42・2271 HP＝http://www.tico.or.jp/

TICO（ティコ）

バッシャーンと牛が豪快に飛び込む。家畜の疫病を防ぐ薬浴槽だ。薬剤入りの風呂で体についたダニなどを除去した牛たちは、さも心地よさげに悠然と去っていく。どこかユーモラスな光景は、TICO（徳島インターナショナルコーポレーション）がアフリカ・ザンビアで行うプログラムの一コマである。

JR徳島駅からローカル線に乗って1時間。阿波山川駅の近郊にあるさくら診療所がTICOの中枢だ。代表の吉田修さんは自称兼業農家の外科医。だが現在の活動のメインは医療ではなく、村興しだという。そのわけは、長年の活動過程で悩んだり迷ったりした体験にある。

徳島生まれの彼は、外科医になった後、89年に海外青年協力隊に入りアフリカ・マラウィに赴いた。国立病院には入院患者だけで900人いたが、医師は5人だけ。レントゲン等の設備も不足し、患者の体に触って手術すべきかどうか判断しなければならなかった。2年後、日本に戻り最新設備の整った病院で勤務した。が、ある悩みが頭をもたげてきた。

「アフリカでは100円、200円あれば治る病気でも治療できなかったのに、日本では一人に500万、1000万円かけることもあります。そのギャップが納得できなかった」

岡山に、災害や紛争発生時に緊急支援活動を行うNGO「AMDA」（アジア医師連絡協議会）がある。専従になり、レバノン、ルワンダなどで生死の境にいる人々を治療した。最後に訪れたのがザンビアだった。

93年、「徳島で国際協力を考える会」を設立した。日本の一地方で世界を考え、各々ができる国際協力を実践しようと。そして97年からザンビアの首都ルサカ市で本格的な活動を開始した（02年に「TICO」と改称）。

「ザンビアでは30％の子どもに成長障害があり、18％の子が5歳までに死ぬ状態でした。死亡原因の半分は栄養失調。それにHIVや肺炎、マラリア…。何からやるべきか悩んだ末、まず子どもの栄養改善から始めようと思い、貧民居住地区でコミュニティセンターを作りました」

07～09年に支援したマサカコミュニティスクールの子どもたちと吉田修さん

1日1食、平均寿命三十余歳という地域で栄養改善教室や識字教室を開き、職業訓練を実施した。持続的に医師を送り込むため、99年にさくら診療所を開設し、常勤医師やスタッフを交替で派遣した。が、情熱を注げば注ぐほど新たな困難がわき出てきた。

「たとえばHIVは妊婦に対する検査や薬の投与を行えばほとんど100％防ぐことができるのに、適切な対策がなされていないため、手の施しようのない子どもが次々と死んでいく。限界を感じましたね」

とりわけ深刻な事態に陥ったのが02年、03年の大干ばつの時期だった。

「トウモロコシが立ち枯れし食べ物がなくなったため、村人は配給を待ったり草を摘んで食べるだけでした。それでTICOでは村全体の能力強化を始めたんです。医療は目に見えやすいけど、もっと突っ込んで、村人自身が生活を支えられるようにしたかったから」

そこで着手したのが「干ばつに強い村作りプロジェクト」（WAHEパッケージ）である。①Water（水）＝井戸掘り等、②Agriculture（農業）＝環境保全型農業、③Health（健康）＝ヘルスポスト（簡易診療所）設置等、④Education（教育）＝子ども用コミュニティスクールと大人用職業訓練所開設等。

新たな試みには難題が山積する。でも現地の人々との強力なパートナーシップにより、着実に成果が実を結んできた。

個々の命を守るために村全体を変えていく。私は話を聞きながら、医師を志した魯迅が祖国の窮状を目の当たりにし、一人一人の病人を直すより社会全体を変革するために作家の道を選択したという逸話を思い出していた。